

ヴィシー政権期における「フェリブリージュ」
並びに「オクシタン研究協会（SEO）」の
動向に関する一考察
— 地方制度改革とオック語の公教育化をめぐる —

福 留 邦 浩

目次

はじめに

第1章 ヴィシー政権における地域構想の理想と現実

第2章 ヴィシー政権と「フェリブリージュ」並びに「オクシタン研究協会（SEO）」
のかかわり

第3章 「フェリブリージュ」の「レジオナリズム」運動

— ジャン・シャルル・ブランを中心に

第4章 オック語の公教育化の要求に対するヴィシー政権の反応

まとめ

はじめに

オック語復興運動に、文化的側面と政治的側面が存在することはピエール・ラヴァルの著書のタイトル『オクシタニー』につけられた「政治的・文化的歴史」という副題を見てもわかる¹⁾。しかし、問題は、その文化的側面と政治的側面という二つの側面がどのように関係しあっているのかである。

文化的運動がどのような経緯を経て政治的運動へと変わっていくのか、政治的運動は挫折するとそれで立ち消えてしまうものなのか。オック語の復興運動を組織的に担った活動団体としては「フェリブリージュ」がある。同団体はフレデリック・ミストラルやジョゼフ・ルーマニユ、テオドル・オーバネルら7人のオック語作家・詩人らによって、1854年に設立され今日に

至っている。当初は気の合う文学者の親睦団体のようであったが、規約の整備とともに、ヒエラルキーのしっかりとした組織となり、「カプリエ」とよばれる代表をふくむ幹部会員（マジョラルとよばれる）らによって構成される上部組織「コンシストワール」のもと、下部組織として、オック語地域を複数の地域に分けた支部会「マントゥナンス」があり、さらにその下部組織「エスコロ」が末端の運動を支えている。毎年、「フェリブリージュ」発足の日の守護聖人にちなんで名づけられた「聖エステル祭」を、南仏の都市を持ち回りで挙げる。祭典では「コンシストワール」や総会などが開かれ、そこでの決議を踏まえて、「宴会 banquet」において、カプリエが締めくくりに演説をおこなう。これは活字として公表され、「フェリブリージュ」の公的主張となる。

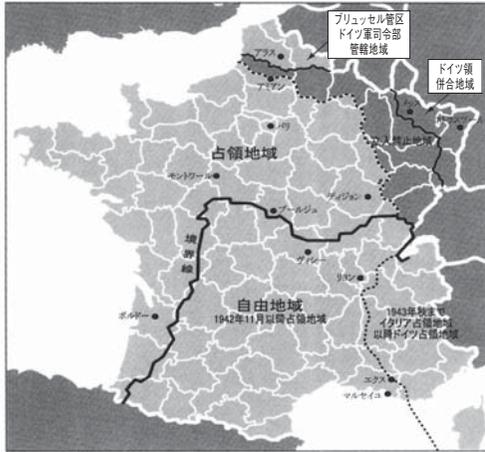
「フェリブリージュ」はその創設以来、表立っては非政治性を表明し、オック語の復興という文化的目的のための組織として活動を展開してきたが、政治的主張ないしは政治的活動への志向は常に胚胎していた。政治的志向の活動は分派活動という形で展開していった。そこには、「フェリブリージュ」が文化的活動を、分派グループが政治的活動を担うという領域の分担を確認することができる。しかし1920年代までは、いずれの分派グループも短期的な活動に終始し、「フェリブリージュ」のような長期的な活動の展開を見ることはなかった。1930年代に入ると、そのような分派グループのなかから、長期的な活動の核となる組織が形成されてくる。それが「オクシタン研究協会 La Societat d'Estudis Occitans SEO」とその機関誌『オック(ク)Òc』、もう一つが新聞『ウシタニオ Occitania』である。そしてSEOおよび『オック(ク)』がオック語や文学研究などの文化的領域を扱い、『ウシタニオ』が政治的要求を扱うなど、分派グループの系譜のなかにも二つの領域の分担が見られるようになってくる²⁾。

戦間期を経てヴィシー政権期になると、この文化的活動と政治的活動のありように大きな変化が見られる。その変化とはいかなるものなのか、オック語復興運動のダイナミズムを解明する手がかりとして、ヴィシー政権期における、これら両側面の関係性を問う必要があると考える。

1940年6月22日、ドイツとの間に停戦協定が結ばれ、フランスの国土は次のように三分割された。ドイツによる併合地域、ドイツの直接占領下に置かれた地域、そしてペタンを首班とするヴィシー政権が統治する自由地域である³⁾。この自由地域には、ボルドーを中心とする南西部(ガスコーニュ)を除く「オクシタニー」の大部分の領域が含まれている。本稿においては、「フェリブリージュ Félibrige」と「オクシタン研究協会 La Societat d'Estudis Occitan SEO」の活動における文化的側面と政治的側面が、どのように関係し合いながら展開していくのかを、ヴィシー政権の地方制度改革およびオック語の公教育化をめぐる、両組織および活動家たちの反応を考察することにより明らかにしたい。

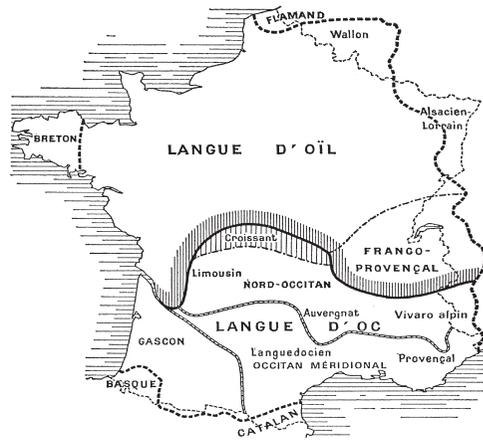
ヴィシー政権期における「フェリブリージュ」並びに「オクシタン研究協会 (SEO)」の動向に関する一考察 (福留)

地図1 ヴィシー政権統治の自由地域



(出典：J-F・ミュラシオル、『フランス・レジスタンス史』、文庫クセジュ、2008年、168ページ。)

地図2 オクシタニー《LANGUE D'OC》



(出典：Pierre Bec, *La Langue occitane*, Presses Universitaires de France, 1955, p.7.)

第1章 ヴィシー政権における地域構想の理想と現実

ヴィシー政権は「労働・家族・祖国」のスローガンのもと、「フランス国」l'Etat françaisと名づける新たなフランスの国家建設を目指した。その目指すところとは、イデオロギー的には伝統的な「フランス」の復活を意図するものである。したがって、ヴィシー政権が掲げる政策が、ただちに「オクシタニー」の権利を十分に保障することに直接つながるものではない。ヴィシー政権の「フェリブリージュ」に対する態度はどのようなものだったのであろうか。

1940年7月11日、ペタンは「フランス国」国家主席 chef de l'Etat français に就任すると、次のようなメッセージを発表している。「総督 (gouverneur) がフランスの大きな州 (province) のトップに置かれ、行政は中央集権化され、かつ分権化される」⁴⁾と。フランス大革命により廃止されたアンシャン・レジーム期の「州 province」の復活は、かつて、シャルル・モーラス Charles Maurras が1892年に「フェデラリズム宣言」において求めていたことでもあった⁵⁾。さらにその主張は、1922年の「マイヤヌ宣言」に基づいて設立された「南仏祖国同盟」の「フランス合衆国 Républiques Françaises」構想においても、諸「州」の「連邦」という形で、「フェデラリズム」の理念が引き継がれている⁶⁾。これら「フェデラリズム」の理念は、「フェリブリージュ」の創設者の一人フレデリック・ミストラルに発するものである。

1940年9月8日、ミストラルの生誕110年祭の挙行に際し、その未亡人と弟子たちを前にして、ヴィシー政権の理論的指導者の一人アンリ・マシス Henri Massis は、ペタンからのメッセージとして、「わたしは彼 (ミストラル) のなかに、われわれが立て直したいと望んでいる伝統

的フランスと、われわれが復活したいと望んでいる新生フランスの唱道者を見ている」と述べている⁷⁾。ここでのミストラルの評価とは、あくまで「伝統的」かつ「新生」するフランス的価値の唱道者としてのミストラルへのそれであり、決してオクシタニーの権利の主張者としてのそれではなかった。前述のペタンの「州」に関するメッセージと合わせて考えると、ヴィシー政権は、その発足当初、「伝統的フランスの立て直し」を、アンシャン・レジーム期における「州 province」復活という形で意図し、その主張を補強する目的からミストラルとの結びつきをアピールしたものと見えよう。

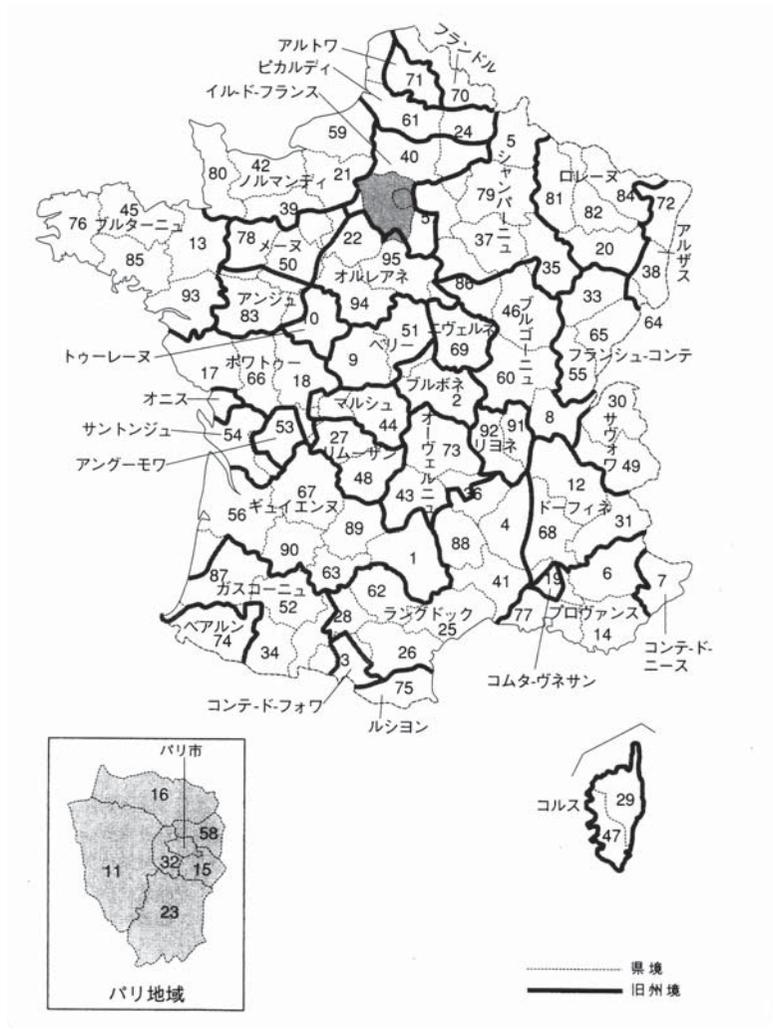
では、ヴィシー政権の「州」制度復活構想とはどのようなものだったのであろうか。詳しく見ておきたい。

ペタンが、国家主席就任と同時に「州」制度復活構想をメッセージとして公表したことは前述した。ヴィシー政権とは、「王党派の伝統主義者と左翼のサンディカリストと近代化論者の寄合所帯という曖昧な体制」⁸⁾であり、モーラスらアクション・フランセーズに代表される「伝統主義者」がイデオロギー的な主張を展開し、専門的な知識と実務能力を持つテクノクラートらが実務を担った。地域主義構想に影響を与えたのはモーラスの薫陶を受けたラファエル・アリバール Raphaël Alibert (法相) やルネ・ジルアン René Gillouin (ペタンの助言者) ら「伝統主義者」たちであった⁹⁾。しかしながら、この地方制度構想が具体化するのには1941年になってからである。そして構想の具体化に携わったのは、いわゆる議会制民主主義的な選挙によるのではなく、国家元首ペタンの任命により組織された代表機関である「国民評議会 Conseil national」であった¹⁰⁾。国民評議会は懸案事項を委員会方式で審議した。委員の顔ぶれを見ると、テクノクラートは参加しておらず、議長となったのはペタンの側近にして歴史家で経済記者のリュシアン・ロミエ Lucien Romier で、委員には民俗学者のジョゼフ・ドゥ・ペキドゥ Joseph de Pesquidoux をはじめとして4人の保守派議員、少数の地方官僚、二人の大学教授、そして、1900年に「フランス・レジオナリズム同盟」を設立して以来、当該活動を牽引してきた「フェリブリージュ」会員ジャン・シャルル＝ブラン Jean Charles-Brun がいた¹¹⁾。

この会議は二回にわたって招集された。第一回は5月6日から5月20日までで、5月16日の会議にはペタン自らも出席し、自らの意見を述べたりもした。第1回目のセッションでは「州 province」の境界線の画定が議論された。最終的に決まった「州 province」の数は20となった¹²⁾。アンシャン・レジーム期の主要な「州 province」の数は、地図3によると33であるから、いくつかの旧「州」は統合されているわけである¹³⁾。したがってその境界線もかなり移動している。これはなぜであろうか。

これには二つの理由が考えられる。まず、評議会が提案する地方制度案においては、大革命で誕生した「県」の境界線を分断する形で新設の州の境界線を決めている。一例を挙げておく。南仏のトゥールーズとカルカソンヌの間の地域には、アンシャン・レジーム期には「ロラゲ

地図3 アンシャン・レジーム期の州区分と県



(出典：柴田三千雄・樺山紘一・福井憲彦『世界歴史体系 フランス史Ⅱ』，1995年。山川出版社，98ページ。本文中の県名の後ろに地図中の番号を付してある。)

地図4 国民評議会案の州区分



(Carte extraite de l'article de Pierre Baral, "Idéal et pratique du régionalisme dans le régime de Vichy", p.920.)

le Lauragais」という名前の地域が存在していた¹⁴⁾。当該地域はフランス革命の行政区画の改革(1790)により、大きく二つに分断された。一つはカステルノダリーを中心とする地域をオート県(地図3の26)所属にし、ヴィル-フランシュ・ドゥ・ロラゲ Villefranche de Lauragais を中心とする地域をオート・ガロンヌ県(地図3の28)所属にしたのである(一部はタルン県にもかかっている)。評議会の州分割案では、オート・ガロンヌ県は「ラングドック LANGUEDOC」に、オート県は「バ-ラングドック-ルシヨン BAS-LANQUEDOC-ROUSSILLON」に編入されているが、ロラゲ地域のオート県側の領域は切り離されて、「ラングドック」に編入されている。このように、大革命で分断された歴史的にまとまりのある地域を一つにして、元にもどしているという点では、旧制度の復活と見ることができよう。これは、中央集権的な国制の根幹をなす「県」に手を加えたという点で注目される。しかし、「県」そのものを廃止するものではなく、基本的に複数の県を合わせて一つの州とするやり方をとっている点は指摘してお

ヴィシー政権期における「フェリブリージュ」並びに「オクシタン研究協会 (SEO)」の動向に関する一考察 (福留) べき点である。

また、評議会案が旧州を復活すると言っても、旧来の「州」をそのまま復活させたわけではない点にも留意すべきである。地図4を見ながら前述の事例で言えば、評議会は本来の「ラングドック」を、「ラングドック」と「バ-ラングドック-ルション」に分けているし、本来別の州である「ルション」を「バ-ラングドック」と統合させている。また「コンテ・ドゥ・フォワ」も復活していない。もう一つの事例を見てみよう。北のブルターニュと南のギユイエンヌには生まれた新設州「ヴァンデ-シャラント-ポワトゥ」である。当該地域は、アンシャン・レジーム期には「ポワトゥ」、「オニス」、「サントンジユ」、「アングーモワ」という4つの州であった。これら4つの州は大革命時に、「ヴァンデ (地図3の17)」、「ドゥ・セーヴル (地図3の66)」、「ヴィエンヌ (地図3の18)」、「シャラント-マリチム (地図3の54)」、「シャラント (地図3の53)」という5つの県に分断された。「ポワトゥ」が最初の3県に、そして残りの3州が「シャラント-マリチム」と「シャラント」の2県に分断されたのである。評議会案では4つの旧州を独立復活させることなく一つにまとめ、名称も「ヴァンデ」、「シャラント」という県名と「ポワトゥ」という旧州名を組み合わせて使っている。「ヴァンデ」はもともと「ポワトゥ」の一部だったのにもかかわらず、ここでは併記されているのである。

以上が評議会の地方制度改革案において、新設州の境界線がアンシャン・レジーム期の州制度と異なっている第一の理由である。中央集権の根幹を成す「県」を完全に破壊するわけでもなく、アンシャン・レジームの諸州を当時のままに復活するわけでもなかったからである。

第二の理由は、フランスの敗戦と関係がある。本稿冒頭でも述べたとおり、フランスは敗戦に際し、ドイツに対し国境のアルザスを割譲した。また、ベルギー国境付近の領土も、ベルギーを占領するドイツ軍の軍政下に置かれた。ベタンはこのような事態が進行してフランスが解体することを恐れた。そこで、歴史的に一つの地域とすべきでも、他の地域と合体させることとした。バルは「フランドル-アルトワ」と「ピカルディ」を一つにして「フランドル-アルトワ-ピカルディ」にした事例、「シャンパーニュ」と「ロレーヌ」を統合して「シャンパーニュ-ロレーヌ」にした事例、また、「フランシュ・コンテ」は「ブルゴーニュ」に、「コルシカ」と「アルプ-マリチム (筆者註 コンテ・ドゥ・ニース)」は「プロヴァンス」に、それぞれ編入した事例をあげて説明している¹⁵⁾。前述した「ルション」が「バ-ラングドック」に、「ベアルン」や「ペイ・バスク」が「ガスコーニュ」に統合されている理由もこのことにより説明できよう。

第2回目の委員会のセッション(1941年8月19日から25日まで)では、「総督^{グーヴェルヌール}(gouverneur)」の役割が議論された。この件に関しても、ベタンは委員会に出席して自らの所感を述べている。ここで注目すべきは、依然として機能する「県」の「知事 préfet」との比較による役割の説明である。ベタンは「(総督の) 役割は戦略を立てる軍のトップの役割であり、知事の役割は軍

隊の指揮官の役割に相当する」と説明し、さらに言い換えて、「総督」の役割とは、個別の行政上の諸問題を取り扱うのではなく、実際の活動に「全体的な刺激 *impulsion générale*」を与えることだと言っている¹⁶⁾。つまり、「総督」は政府の命令を上意下達式に実行するのではなく、地方政治においては、政府からも独立した絶対的な権力を保持するのである。地方政治においては、「総督」を頂点にして行政官のヒエラルキーが構築されるのである。ただし、アンシャン・レジーム期の「総督」と異なっている点は、政府の意向によって「総督」を頻繁に交代させるという点である¹⁷⁾。アンシャン・レジーム期の「州 *province*」とは、中世における「領国 フランク・ボテ *principauté*」の名残なのであり、「総督」は大封建領主の末裔である¹⁸⁾。少なくとも16世紀以後のアンシャン・レジーム期の「総督」は世襲であり、国王といえども簡単に罷免できないのである¹⁹⁾。

このように見てくると、国民評議会の地方制度改革案が「復古的」なのは、「州」を表す単語として“*région*”でなく、アンシャン・レジーム期の“*province*”^{プロヴァンス}を、その首長を表す単語として、“*gouverneur*”^{グーヴェルヌール}を使用するという点にとどまり、外観は古色蒼然としているが、その中身は時代錯誤ではなく、むしろ状況に適応するための変革であったとすることができよう。この点に関しては、ベタン自身も、1941年11月18日のリヨンの商工会議所での演説で、「州 *province*」は5つないし6つの「県」をまとめ直すこと、なによりも経済的な便宜を優先すること、という2点を述べている²⁰⁾。

しかしながら、国民評議会による地方制度改革は「案」のままにとどまった。パクストンは次のように言う。「言葉を発するのは国民評議会である。しかし行動するのは、ダルラン提督の政府であった」²¹⁾と。ヴィシー政権は国家主席と「首相 *Président du conseil*」をベタンが兼ねていたが、実質的な政務は「副首相 *vice-président du conseil*」のラヴァル *Pierre Laval* が1940年12月まで、その後フランダン *Pierre-Étienne Flandin* の短期間の副首相就任を経て、1941年2月からダルラン *François Darlan* が担当していた。実際の地方制度は国民評議会での議論と無関係なところで整備されたのである。1941年4月19日、ダルラン政府は「地域圏知事 *préfet régional*」の新設を発表した。日付を見れば、ダルランの改革の方が国民評議会の議論よりも先に実行されていたことになる。ダルランの改革は秩序維持と食糧供給の円滑化を目的とするものであった。それは数県をまとめて一つの「地域 *région*」とし、県知事の中の一人が「地域圏知事」となるというものであり、旧来の「州 *province*」とは質を異にする制度であった²²⁾。ヴィシー政権が直接統治する自由地域において、国土は六つの「地域 *région*」に分けられ、リモージュ、クレルモン-フェラン、リヨン、トゥールーズ、モンペリエ、マルセイユの6都市が官庁所在地となった。そしてそれらの都市が存在する県の県知事が「地域圏知事」となるのである。彼らは「地域」の動静を直接ベタンに報告するのである。ベタンは1941年8月12日に、フランス人民に向けて「メッセージ」を発表し、15項目にわたって、政府の

ヴィシー政権期における「フェリブリージュ」並びに「オクシタン研究協会 (SEO)」の動向に関する一考察 (福留) 役割について大まかな説明を行っている。その7番目の項目において、「地域圏知事」を「州総督」の「最初のスケッチ première esquisse」であると述べている²³⁾。ペタンは「地域圏知事」を過渡的なものと考えていたようである。ペタンは「州総督 gouverneur du province」を恒久的な地方制度と考えていたものと思われる。しかし、実際に機能したのは「地域圏知事」の制度であった。

地図5 ダルラン改革による地域圏の区分図



(Carte extraite de l'article de Pierre Baral, "Idéal et pratique du régionalisme dans le régime de Vichy", p.921.)

ここで、これまで述べてきた国民評議会の地方制度改革プロジェクトとダルランの改革を踏まえて、ヴィシー政権の地方制度改革とはどのような意味を持つものだったのか、もう一度考えてみたい。クリスチャン・フォールは「フランス国 (L'Etat français) はフランス革命によって基礎をつくられたジャコバン的中央集権主義を抹消する」と述べた²⁴⁾。革命以来、フランスは中央集権的国制を作り上げることに腐心してきた。それは、言語的に見れば、オック語をは

じめブルトン語、バスク語、カタルーニャ語、アルザス語など多様な言語世界であったフランスを、「フランス語」に統一していく過程でもあった。そのような動きに組織的に抵抗した最も早い例が、本稿で取り上げている「フェリブリージュ」であった。「フェリブリージュ」の活動はオック語の復興にとどまらず、「フェデラリズム」の主張に見られるように、政治的なレベルでもフランスの中央集権の推進に修正を求めるものであった。しかし、それはあくまでも民間組織の取り組みであり、政府レベルでの取り組みではなかった。ヴィシー政権は、政府としてはじめてこの問題に正面から取り組んだのである。では、この改革は「ジャコバン的中央集権」を否定するものであっただろうか。パクストンは「地域圏知事」について、「職権が中央から地方に移されたわけではない。単に、1791年当時よりも人の移動や情報が速くなった時代に合わせて、新たな官僚機構がつけ加わっただけであった」²⁵⁾と述べている。「州総督」の制度にしても、前述したように「県」制度の維持という点では中央集権の本質は変わっていない。しかし、一層重要なことは、「州総督」の権限の強化および「州総督」のもとでの官僚ヒエラルキーの構成という点では、各「州」ごとに中央集権的統治システムが維持されるという点である。

「州総督」にせよ「地域圏知事」にせよ、ヴィシー政権による地方制度改革は「フェリブリージュ」や「オクシタン研究協会 La Societat d' Estudis Occitans SEO」に、どのように受け取られたのであろうか。

第2章 ヴィシー政権と「フェリブリージュ」並びに 「オクシタン研究協会 SEO」のかかわり

オック語および南仏古来の習俗を維持発展させることを目的として、1854年に設立された「フェリブリージュ」の活動には、その中心的設立者であるフレデリック・ミストラル以来、「フェデラリズム」を標榜し政治的主張を行うグループが出現していたことは前述した。しかし、それらのグループの活動はいずれも短期間で終息し、「フェリブリージュ」の周辺活動にとどまった。

1930年代に入り、運動は、それまで「個人」を単位とした展開から、より大衆の動員を目指す方向へと活動のありようを変化させてきた²⁶⁾。そのような時代の要請に応ずる形で設立され活動を展開したのが、雑誌『オック(ク) Òc』と新聞『ウシタニオ』²⁷⁾に支えられた「オクシタン研究協会 SEO 以下 SEO」である。

ここでは、ヴィシー政権に対し「フェリブリージュ」やSEOが、どのような対処をしたのかという点について考察してみたい。

「フェリブリージュ」について見ていくと、前述したベタンの1940年7月11日の「州」および「州総督」復活のメッセージに接した「フェリブリージュ」の会員らは、カラメルとジャ

ヴィシー政権期における「フェリブリージュ」並びに「オクシタン研究協会 (SEO)」の動向に関する一考察 (福留) ヴェルの表現を借りるならば、「ほとんど1世紀に喟々とする夢を実現する可能性」をそこに見出して積極的なペタン支持を表明した²⁸⁾。前述のように、同年9月8日ペタンがミストラルの生誕110年祭に出席し、ミストラルへ賛辞を呈すると、ペタンの人気はアルル、マルセイユ、エクス・アン・プロヴァンス、トゥーロン、アヴィニョンなどいたるところで熱狂的なものとなった²⁹⁾。

トゥールーズでは、11月6日に、「花の競詩アカデミー l'Académie des Jeux Floraux」³⁰⁾の会員らが、同じく会員でもある前述の国民評議会委員のベキドゥを中心にして次のような宣言を発している。「フランスをその民族的伝統へ、その信念へと立ち戻らせることは、フランスにその魂を返すことであり、フランスを救うことである！しかし、この伝統は、われわれの州 (province) においてでなければどこに見出すことができようか。長い間忘れ去られていたとはいえ、州は死んではない」³¹⁾と。

上記以外にも1940年から1941年にかけて、地方の碩学、民俗学者、草の根のフェリブール³²⁾らが講演会、展覧会、論説、詩、演説などを通じてペタンおよびヴィシー政権に対する熱狂を表明している³³⁾。

さらに、「フェリブリージュ」とヴィシー政権の関係を親密にさせる要因として、「アクション・フランセーズ」との関係、とりわけシャルル・モーラスとの関係を考慮する必要があるだろう。

1941年、「フェリブリージュ」の代表^{カブリエ}³⁴⁾となったのが、「アクション・フランセーズ」会員であるフレデリック・ミストラル (ヌヴェー) Frédéric Mistral Neveu³⁵⁾である。モーラスと「フェリブリージュ」の関係は、ヴィシー政権成立の50年近い前からのものである。ここで、モーラスのプロフィールを「フェリブリージュ」とのかかわりという点から確認しておきたい。

1868年、マルセイユ北西のマルティーグ Martigues に生まれたモーラスは、1885年にパリに移り、1888年に「フェリブリージュ」の創設者の一人テオドル・オーバネルに関する論文を書いて認められ、「フェリブリージュ」の会員となった。1892年に、いわゆる「フェデラリスム宣言」を発表したことにより、モーラスは「フェリブリージュ」のパリ支部である「パリ・フェリブール協会 la Scicité des Félibres de Paris」を除名され、翌年、独自の組織「パリ・フェリブレンコ協会 la Soucieta Felibreco de Paris」を設立した³⁶⁾。1899年に「アクション・フランセーズ」に加入し、王政復古のキャンペーンを展開する。1940年、ヴィシー政府が成立すると、モーラスはその理論的支柱となったことは前述した。ミストラル・ヌヴェーがカブリエとなった1941年には、「フェリブリージュ」の「マジョラル」となっている³⁷⁾。

モーラスとヴィシー政権の関係について、アブラートは様々な評価を紹介している。「モーラスは元帥 (ペタン 筆者註) の思想的師、鼓吹者となった。ヴィシーの国家は一種の王政ないしは前王政^{プレモナルシー}を構成しているという点において、モーラス的な国家と見なしうる」³⁸⁾という見方もあれば、「モーラスの影響は過小評価されてもならないし、過大評価されてもならない。モー

ラスは10回程度ヴィシーに赴いたようであり、公式には2回、諮問されたようである³⁹⁾という慎重な見方もある。確かに、パクストンを引用して前述したごとく、ヴィシー政権には、王党派とは思想的に相容れない人々も加担している点も考慮しなければならない。アブラートは、「それでもやはり、モーラスはヴィシー政権の知的保証人 (caution intellectuelle) の役割を果たした。多くの点で彼の言うことは耳を傾けられ、従われた。オクシタン運動はその歴史上のどの時代よりも、時の政権から、あるいは(時の政権に)近い遠いの差はあれ、その政策を鼓舞する人物たちからの確固とした支持を受けたのである。その幸運を利用しようとしたことは理解できる」⁴⁰⁾と述べている。

では、SEOとヴィシー政権の関係はどうであったのであろうか。

1940年7月、ペタンに宛てて二通の書簡が公表された。第一のそれはSEO代表のアンドレ・ジャック・ブサック André Jacques Boussac、同事務長ルイ・アリベール Louis Alibert および同総務イスマエル・ジラルール Ismaël Girard ら3名の連名によるものである。ブサックは前述の新聞『ウシタニオ』を引き継ぐ形で創刊された雑誌『オックの土地』の編集長でもある。ペタン宛の二つの書簡が公表されたのも同誌上においてである⁴¹⁾。第二のそれは前三者に加えて、15名近い「フェリブリージュ」の幹部会員が賛同者として名を連ねている。たとえば、マリウス・ジュヴォー (カプリエ), ジョゼフ・ダルヴォー Joseph d'Arbeaud (マジョラル), アンドレ・ジョベール André Jaubert (医師, マジョラル, プロヴァンス支部会⁴²⁾ 会長), ルネ・ファルニエ (前述, 弁護士, リムーザン支部会会長), ピエール・アゼマ Pierre Azéma (モンペリエ市助役, ラングドック支部会会長), ミシェル・カメラ Michel Camélat (マジョラル, ガストン・フェビュス地区会⁴³⁾ 事務長), レオン・テシエ Léon Tessier (マジョラル) らである⁴⁴⁾。その内容について見てみると、第二の書簡においては、「元帥閣下、国父のようなあなたに対し、われわれの信頼の念を表明し、また、フランスの州の復活に関するいくつかの重要な点について好意を寄せてくださることにつきまして、敬意を表するべく直接あなたにお手紙をしたためる失礼をお許してください」⁴⁵⁾ という内容の文言を読み取ることができる。

SEOは組織としてヴィシー政権にかかわることはしていないという点は重要である⁴⁶⁾。しかし、上述のように幹部クラスのメンバーがヴィシー政権を支持している。注目すべきは、「フェリブリージュ」とのかかわりである。ブサック自身も1940年に「マジョラル」に選出されている⁴⁷⁾。彼は1941年5月13日にアルビでペタンと会見した際、SEOの代表としてよりも、「フェリブリージュ」の「マジョラル」としての肩書にこだわった⁴⁸⁾。1940-1942年にかけて、「フェリブリージュ」とSEOは組織的には別々であっても、相互交流が活発であったと見てよい。

「フェリブリージュ」は、設立当初から公式には「非政治性」を標榜し、政治的な主張については分派活動という形をとってきた。分派グループの活動はほとんど短期で終了してしまうが、その主張は次の世代へと肯定的にせよ批判的にせよ継承されていったのである。1930年代

ヴィシー政権期における「フェリブリージュ」並びに「オクシタン研究協会 (SEO)」の動向に関する一考察 (福留) に入り、従来の政治的な主張の濃い分派を統合して誕生したのが SEO である。しかしここで注意したいのは、ヴィシー政権期の SEO そのものは極めて非政治的な活動を展開しているという点である。1940 年 10 月 15 日に SEO は「規約」を発表するが、組織を文化的な性格の色濃いものとして届け出ている⁴⁹⁾。SEO が特に力を入れたのが研究部門である。その研究部門は極めて専門性が高く、決して「大衆的」とは言えない。そこでは民衆の話し言葉としてのオック語よりも、学術分野での使用に耐えうるオック語が問題とされているのである。では、政治的な問題への関心を失ってしまったのか。そうではなく、SEO もまた分派活動の形をとって活動を展開しているのである。雑誌『オック(ク)』は SEO の機関誌として学術的な記事を掲載し、新聞『ウシタニオ』の後継雑誌『オックの土地』は時事的な記事を掲載する。ヴィシー政権へは、メンバー個々人が「フェリブリージュ」の会員としてかかわっている。これは、これまでの「フェリブリージュ」がとってきたやり方と同じである。一方、これまで「非政治性」を標榜してきた「フェリブリージュ」が、ヴィシー政権期になるとヴィシー政権の政策に積極的にかかわるなど、政治性を強めている。「フェリブリージュ」と SEO の性格が、ヴィシー政権期においては逆転しているのである。

では、「州 province」の復活をめぐる、ヴィシー政権と「フェリブリージュ」および SEO の間には合意が存在していたと見るができるであろうか。その問いに答えるためには、第一章で検討したヴィシー政権の地方制度の議論と、「フェリブリージュ」および SEO で培われてきた議論との比較が必要になって来よう。後者の議論は前者の議論にどれぐらい反映されているのであろうか。

第3章 「フェリブリージュ」の「レジオナリズム」運動 — ジャン・シャルル・ブランを中心に

その点を考察するために、前章で触れた「国民評議会」の委員の一人ジャン・シャルル・ブランについて、ミレイユ・メイエの論文を参考にしながら考察を進めたい⁵⁰⁾。前述したごとく、シャルル・ブランは「フェリブリージュ」会員であり、1900年には「フランス・レジオナリスト同盟 (Fédération régionaliste française 以下 FRF)」を結成した。さらに彼の活動は実践面にとどまらず、理論的な著作も遺し、「フランス・レジオナリズムの父 père」とも「使徒 apôtre」とも、「法王 pape」とも称せられている人物である⁵¹⁾。

シャルル・ブランは 1870 年 12 月 29 日モンペリエに生まれた。小ブルジョワジーの家庭で、政治的には正統王朝主義^{レジテイミスム}を奉ずる環境であった。彼がオック語で詩を書いたのは 18 歳のときである。モンペリエ時代にルイ・クサヴィエ・ドゥ・リカルド Louis-Xavier de Ricard と親しくなった。ドゥ・リカルドは、政治的には共和主義、反教権主義を掲げながらも中央集権主義

に反対する、ブルードンの影響を受けた「フェデラリスト」である。ドゥ・リカールは、1876年、『フェデラリズム』と題する著作を発表し、「フェリブリージュ・ルージュ」と呼ばれるグループの代表的人物と目されている。シャルル・ブランのレジオナリズム思想はブルードンとドゥ・リカールから大きな影響を受けている⁵²⁾。

1892年にはパリに居を定め、シャルル・モーラスの知遇を得ている。同年、モーラスが「フェデラリズム宣言」を発表して「フェリブリージュ」のパリ支部から分派すると、シャルル・ブランもこれに同調し、「パリ・フェリブレンコ協会」の総書記に就任している⁵³⁾。

シャルル・ブランはドゥ・リカールとモーラスという、「フェリブリージュ」における「フェデラリズム」の系譜を引き継いでいる点が重要である。しかしながらシャルル・ブランは自らの思想を「フェデラリズム」と名付けていない。それはなぜであろうか。それには次のような事情が関与している。

シャルル・ブランは共和主義者であり、さらにドレフュス事件に際して、ドレフュス擁護の立場に立った。そのためにモーラスとの関係は疎遠になっていった。モーラスは1898年に雑誌『アンシクロペディスト』において「地方分権 *décentralisation* の思想」と題する論説を発表し、「フェデラリズム」と「ナショナリズム」を結び付けること、そして、そのためには強い執行府と弱い議会が必要不可欠だと主張した。このことにシャルル・ブランは危機感を覚え、共和主義の立場から地方分権を主張することの重要性を認識したのであった。そして「フェデラリズム」がモーラスおよび反共和主義と結び付けてとらえられるようになったため、「レジオナリズム *régionalisme*」の語を用いるようになったのである⁵⁴⁾。

シャルル・ブランは1900年にFRFを設立すると、翌年には「フランス・レジオナリスト同盟宣言」を発表し、この組織を特定の地方や政治的立場、社会階層に偏らずに、(アクション・フランセーズを除く)あらゆる組織や人々を糾合する「共通の場」を提供すること、したがって「非政治的 *apolitique*」な立場に立つことを強調した。会員にはドゥ・リカールやフレデリック・ミストラルらもいた⁵⁵⁾。

1902年には雑誌『アクション・レジオナリズム *L'Action Régionalisme* 以下AR』の編集デスクを務め、フォークロア研究や催し物への参加呼びかけ、論説など、さまざまな内容の記事をさまざまな政治的立場の人々に提供してもらっている。その顔ぶれは、クレマンソー、ポアンカレ、ブリアン、ジョレス、モーラス、コンブ、ミルラン、タルデューなど多彩である⁵⁶⁾。彼らの間で「レジオナリズム」をめぐるさまざまな議論が展開された。ここで驚くのはジャコバン主義的な中央集権主義者であるクレマンソーの名前があることである。当然、クレマンソーは地域主義的主張には否定的である。一つの論争は「レジオナリズム」そのものの是非を問うものである。クレマンソーとタルデューはこのテーマをめぐる、『ル・タン *Le Temps*』、『ローロール *L'Aurore*』、『ラ・デペシュ *La Dépêche*』各紙上において論争を展開し

ヴェシー政権期における「フェリブリージュ」並びに「オクシタン研究協会 (SEO)」の動向に関する一考察 (福留) ている⁵⁷⁾。もう一つの論争はモーラスとポール・ボンクールとの間で交わされた。テーマは「レジオナリズム」そのものを否定はしないが、それは政治体制の問題なのか、共和主義と「レジオナリズム」は両立しうるのか、というものである。モーラスは政治体制の変革が必要であり、共和政とレジオナリズムの両立は難しいという立場であり、ポール・ボンクールは二つの両立は可能であり、政治体制まで変革しなくてもよいという立場である⁵⁸⁾。非政治性を標榜する FRF のメンバーが、別行動のような形で政治論争を行っている点が注目される。

ここまで見てくると、シャルル・ブランの FRF や AR の運営の仕方に特徴があることに気付く。彼は FRF の代表ではあるが、決して主宰しようとはしなかった⁵⁹⁾。あくまでも議論の場を提供することに徹している。これはフレデリック・ミストラルの「フェリブリージュ」の運営の仕方と似ている。ミストラルは「フェリブリージュ」の初代カプリエを 26 年間(1862-1888 年)も務めているが、決して強権的に組織運営を行ったわけではない。王党派から共和派、カトリックから反教権主義者まで政治的な主張が対立する会員らを「オック語復興」という目的のもとに団結させるべく、公式の立場を「非政治的」な活動とし、政治的な主張は分派的な形でこれを黙認するやり方をした。ミストラルも「オック語復興」のための活動の場を提供することを第一に考えている⁶⁰⁾。

1911 年、シャルル・ブランは『レジオナリズム Le Régionalisme』を発表した。彼の論の進め方は、自説を繰り返して読者を説得するというよりも、それぞれのテーマについて、これまでのレジオナリストたちがどのような説を展開しているかを紹介しながら、妥当な結論を導き出すという手法を取っている。

シャルル・ブランは「レジオナリズム」をどのようなものだと考えていたのであろうか。メイエによれば、それは政令による上からの押しつけでなく、「自発的な *spontané*」ものだという。「地域 *région*」自身が地方のイニシアティブと自覚化により、地域組織を作るべきであり、その境界も「一種の自然法」により「自発的に」決まる。国家の役割とは、「地域」の決めたことを「公認 *consécration*」することでしかない。このような考え方はプルドンに影響されたものであるとメイエは言っている⁶¹⁾。

「地域 *région*」の構造は 3 段構造になっており、最も下位に「市町村 *commune*」があり、中間にあるのが「郡 *arrondissement* または *district*」や「小郡 *canton*」がくる。そして最上部に「地域 *région*」がくる。*arrondissement* と *district* と *canton* の違いは大きさであり、どれにするかは、既存の「県 *département*」の処遇も含めて、最終的な結論は出していない。ただ、中間組織の大きさは、かつての「くに *pays*」の範囲を尊重する「自然な *naturel*」ものでなければならないとシャルル・ブランは言う⁶²⁾。

しかし何よりも特徴的なのは、これまでの「レジオナリズム」の議論を「伝統的・感情的レジオナリズム *le régionalisme traditionnel ou sentimental*」と「経済的・社会的レジオナリ

スム le régionalisme économique et social」に分け、自らの立場を後者に位置付けながらも、前者の視点を取り入れている点である⁶³⁾。

メイエはシャルル・ブランの「経済的レジオナリズム」について2点指摘している。

一つは「土地への回帰の促進」である。対象は「労働者」と「小土地所有者」層である。労働者の田舎での生活を快適で生産的なものにして田舎に定着させること、そのために民衆演劇や野外演劇、コーラスや祭り、自治体図書館などの充実を図り、村での気晴らしの発展を促すのだという。小土地所有者については農業協同組合の結成を促し、小規模な産業を援助することを提案している。もう一つは再植林事業による「くに pays」の開発である。これが景観の保全事業につながり、観光事業の発展にもつながる。さらに景観保全のために地域同士で「協力しあう se fédérer」ことで、鉄道や運河、河川整備事業などを推進することもできる。シャルル・ブランは、「レジオナリズム」運動によって農業組合や労働者団体の連合化（fédéré）を推進する可能性を示唆し、「同業団体（corporation）や地域（région）、職業（métier）ごとに確立される労働条件の脱中央集権化（décentralisation）」についても語っている⁶⁴⁾。

メイエは『レジオナリズム』の意義について次のように述べている。「この著作は、ジャン・シャルル・ブランが『感情のレジオナリズム』とよぶものとして、田舎生活の実践や方法の懐古趣味的な擁護としてとらえられていたレジオナリズムの思想史において、重要な一段階を刻した。レジオナリズムをその時代の議論の中に位置付けようとする意志によって、この運動をトクヴィルからプルードン、オーギュスト・コント、ル・ブレ、モーラスを経てボン・クールにいたる知的系譜のなかに位置付け直したことによって、フランスの行政組織の再編プログラムおよび地域の経済的・文化的発展の提示によって、レジオナリズムが『システム』ではなく、現実主義と、多様性と時間の要素を考慮する経験主義とを両立させる『方法』であるということを示そうとする意志によって、古いコスチュームの保存者とかフォークロアの祭りの主催者だとかの、ある種の田舎好き運動のノスタルジーから解き放つことで、レジオナリズムを政治思想史のなかに位置づけたのである」⁶⁵⁾と。

第一次世界大戦後、1921年のアイルランド自由国の創設、1931年カタルーニャ自治政府の創設など、「民族自決」の風潮が高まりを見せる国際情勢もあり、戦間期のフランス国内の世論や政界でもレジオナリズムの議論が関心を呼んだ。1924年に結成された、中道右派、キリスト教民主主義を掲げる「人民民主党 le Parti Démocrate Populaire PDP」はレジオナリズムに理解を示し、同年の下院選挙で誕生した14人の議員のうち、「地域」出身の議員の内訳はブルトン人5人、アルザス人4人、ロレーヌ人2人、ベアルン人1人であった⁶⁶⁾。

こうしてシャルル・ブランの「レジオナリズム」は、「フェリブリージュ」の枠も、「オクシタニー」の枠も超えて、他の地域の運動にも影響を与え、運動に普遍性を与えたと言えよう。さらに、シャルル・ブランは「ヨーロッパ連邦」案の作成にも取り組んでいく。そして1918

ヴィシー政権期における「フェリブリージュ」並びに「オクシタン研究協会 (SEO)」の動向に関する一考察 (福留) 年に「ブルードン協会」の設立に参加し、パリ大法学部の国際法研究所に「フェデラリズム」の講座を開講し、講義をおこなう一方で、1921年にはブルードンの『フェデラリズムの原理』の新版を自らの序文を付して出版するなど、一層ブルードンへの傾倒を見せている。その序文において、彼は「レジオナリズム」の教義はすべて『フェデラリズムの原理』のなかにある、と書いている⁶⁷⁾。戦間期のシャルル・ブランは「レジオナリズム」をめぐって、執筆、講演、催し物への参加など精力的に活動した。それらの活動で彼が訴えたことは1911年の『レジオナリズム』での主張の路線に沿うものである⁶⁸⁾。

このように、戦間期におけるFRFの活動が活発化すると、その影響を受けて、各地で雑誌や組織の設立が相次いだ。1919年にはブルターニュで雑誌『ブレイズ・アタオ Breiz Atao』が創刊され、1923年には「ブルターニュ自治党」が、1932年には「ブルターニュ民族党」が誕生する。アルザスにおいても自治要求の活動が見られるという⁶⁹⁾。

では、「オクシタニー」においてはどうかであろうか。メイエは事例として「オクシタン研究協会 SEO」だけをあげている⁷⁰⁾。しかし、1920年エクス・アン・プロヴァンスでの「青年地域主義者同盟会議」の開催から、1922年の「マイヤヌ宣言」、1923年の「南仏祖国同盟」、1924年の雑誌『オック(ク) Òc』の創刊、1930年代の新聞『ウシタニオ』、そしてSEOの設立に至るまでの戦間期の一連の動きを見てみると、そこにFRFやシャルル・ブランの活動の影響があることは疑いえない⁷¹⁾。

一方で、シャルル・ブランは「伝統的・感情的レジオナリズム」に属する活動も行っている。特に、農村集落における伝統建築物の保存と育成に高い関心を払っている。

1937年、パリで「芸術と技芸の国際博覧会 l'Exposition Internationale des Arts et des Techniques」が開催された。ここにはフランスの諸州 (province) が伝統建築に関する講演の場を持ち、実際の建築も展示して見せた。特に「地域センター le Centre Régional」では、諸州が参加する27のパヴィリオンを運営した。その副センター長となったのがシャルル・ブランである。またフォークロアの研究にも関心が高い。国際博覧会と同年、第1回国際フォークロア会議がフランスで開催された。シャルル・ブランも組織委員会の委員の一人であり、FRFの第32回年次総会もこの国際会議の準備に充てている⁷²⁾。

ヴィシー政権はドイツへの敗戦のショックを隠すために「国民革命」の推進を訴え、その一環としてフォークロアに多大の関心を示した⁷³⁾。「自然な」共同体である「家族」や農村を単位として「真のフランス」を復興するために、人々の「大地への回帰」願望を刺激する必要があるためである。シャルル・ブランの「レジオナリズム」には、「土地への回帰」やフォークロアへの関心など、ヴィシー政権の政策と重なり合う部分があった。1940年7月11日のベタンによる「州 province」および「州総督 gouverneur」復活のメッセージは、フェリーブルたちだけでなく、FRFのレジオナリストたちにも期待を抱かせたのである⁷⁴⁾。そして1941年5月、

シャルル・ブランが「国民評議会」の委員となり、「州」の復活構想に参画したことは前述した。ペタンは、「州総督」の具体的な候補者名を挙げている⁷⁵⁾。その候補者リストのなかに、「プロヴァンス州」の総督候補としてシャルル・ブランの名が挙げられているのが興味深い。候補者の出自は外交官や議員などさまざまで、皆、教養のある名望家であるが、世襲貴族ではない。そしてそれぞれの地域と結びつきは深い、行政経験はない⁷⁶⁾。

メイエによると、シャルル・ブランがヴィシー政権に政治的なコンテキストで積極的にかかわったのは1943年までだと言う⁷⁷⁾。その後、シャルル・ブランは著作活動にいそしんだ。シャルル・ブランが1943年を境に態度が変わったのはなぜなのであろうか。メイエは具体的な理由を挙げてはいない。しかし、その理由はヴィシー政権が実現した地方制度とシャルル・ブランが掲げる「レジオナリズム」の違いが明らかになったからだと思われる。

「国民評議会」の構想する「州」および「総督」は、歴史に裏打ちされた制度であり、その点についてはシャルル・ブランも異論はなかった。しかし、ダルランによる「地域圏知事」制度の実施は、シャルル・ブランの掲げる「レジオナリズム」の思想とはまったく相容れないものである。確かにシャルル・ブランも、前述のように経済的地域主義について語っており、「地域」区分を経済効率の観点から考えるダルラン改革と近い部分も存在するように思われる。しかし、ブルードン流の、「ボトムアップ」型の合意形成による自発的な「地域」形成と、テクノクラートによる官僚支配の「トップダウン」型の「地域圏知事」とは、合意の形成過程において相容れないものであろう。

第2章において「フェリブリージュ」やSEOが1940年から1942年まではヴィシー政権の地方制度改革に大いに期待していたことを確認した。彼らが望む「州 province」のあるべき姿も、シャルル・ブランのそれに近いものであった。なぜならば、シャルル・ブランの「レジオナリズム」思想は、ルイ・クサヴィエ・ドゥ・リカールおよびモーラスの「フェデラリズム」を発展させて形成された思想であり、「フェデラリズム」の理念は「フェリブリージュ」およびその分派から発展したSEOの活動にも内在しているからである。しかし、彼らがヴィシー政権に期待を抱く要因はそれだけではなかった。その要因とは「フェリブリージュ」にとってもSEOにとっても、活動の目標であるオック語の復興に関係するものである。次章においてはヴィシー政権下で行われたオック語に関する諸運動、諸政策について見ていきたい。

第4章 オック語の公教育化の要求に対するヴィシー政権の反応

この章では、オック語の公教育導入がどのようにしてなされていったかを、クリスチャン・フォールの『ヴィシーの文化政策 フォークロアと国民革命』に主に依拠しながら探っていき⁷⁸⁾。1940年7月5日、「フェリブリージュ」のカプリエ、マリウス・ジュヴォー Marius

ヴィシー政権期における「フェリブリージュ」並びに「オクシタン研究協会 (SEO)」の動向に関する一考察 (福留)

Jouveau は、オック語復興に関し、公教育相にオック語をはじめとした地方言語の公認を求める要求書を提出している⁷⁹⁾。そして翌 1941 年には、ペタンがミストラルの教義およびオック語の教育に高い関心を寄せたことへの感謝の印として、彼に「名誉賛助会員 *Sòci d'Honneur*」の称号を贈っている⁸⁰⁾。

「フェリブリージュ」は要求書への回答を黙って待っているわけではなかった。1941 年 9 月には、プロヴァンス語教育の規約を政府に提案し、オック語教育に対応できる教員および教材の準備が整うまで「フェリブリージュ」が一時的に協力することを申し出ている。また語学授業以外の「文化プログラム」による学校教育についても、民族コスチュームやフェスティバル、芝居など、「フェリブリージュ」の下部組織「エスコロ」がそれらの準備を請け負うことなどを決めている。さらには国民教育省との特権的關係を維持する特別委員会の設置なども予告している⁸¹⁾。

要求書への回答は、要求書提出から 1 年以上たった 1941 年 12 月 24 日、公教育閣外相ジェローム・カルコピノによって省令として出された。その内容は、「教師が校内において、正規の時間外に、随意科目として週 1 時間 30 分を限度として地域言語の授業を実施することを認める」⁸²⁾というものであった。オック語を公教育の場で教授することを初めて認めたのはヴィシー政権である。それは「フェリブリージュ」の長年の念願であった。

さらに、最終的な目標であるオック語の公用語化をめざして、「フェリブリージュ」は積極的にヴィシー政権に協力する姿勢を見せる。「フェリブリージュ」は、毎年、オクシタニーの各都市を持ち回りで「聖エステル祭」を行っている。1942 年に同祭がアルルで開催された折の総会で、カブリエのミストラル・ヌヴェーは、「フェリブリージュ」と直接関係する問題について、ヴィシー政権と接触を持つための機関をヴィシーに置くことを提案し、承認されている⁸³⁾。

SEO もこの点では「フェリブリージュ」と同じであった。SEO は中等教育および高等教育の教員らから構成されるセクションを立ち上げた。責任者はシャルル・カンブルーである⁸⁴⁾。カンブルーはモンペリエ大学で「オック語およびオック語文学講座」を担当しており、1942 年 11 月 15 日に、大学で上述のセクションの会合を開催している⁸⁵⁾。1943 年 3 月にはその会合から大臣あてに意見書が出され、オック語を中等教育に公的に導入すること、ラングドック地域でオック語文芸をバカロレアの随意試験科目として認可し、オック語の義務化を促す、などの要求がなされた。

オック語復興に関する「フェリブリージュ」のスタンスと SEO のそれとの間には、微妙な違いが認められる。「フェリブリージュ」はどちらかといえば初等教育に力を入れ、子供たちとの交流にも積極的なものに対し、SEO は中等教育以上を対象とし、知識人の養成に力を入れようとしている。初等教育に力を入れようとする「フェリブリージュ」のほうが、より大衆へのアピールを意識しているように思われる。第 2 章において、政治へのかかわりという点で、

ヴィシー政権期における「フェリブリージュ」と SEO の性格の逆転について指摘したが、大衆へのアピールという点についても逆転が起きているのである。

1942年、ヴィシーに「オック語擁護常設センター le Centre permanent de défense de la langue d'oc」が設立され、「フェリブリージュ」と SEO のスポークスマンが所属することとなった。1941年から1943年にかけて、オック語教育に関する公聴会が複数回開催されているが、彼らもそこに出席し、専門家として発言している。そこには大学人、コレージュやリセの教員、小学校教員やフェリブルらが参加した。会議の議長となるのはさまざまな組織の幹部である。たとえば1941年9月26日と27日にアルルで開催された会議の議長は「フェリブリージュ」のカプリエ、ミストラル・ヌヴェーが務めた。1942年12月14日から17日までの会議はシャルル・ブランが議長となっている。大学教授や「大学区視学 l'inspecteur d'académie」らも参加し、そこではオック語教育の必要性についての議論が戦わされた。同じ年の4月と翌年の4月、トゥールーズのオック語教育機関「コレージュ・ドクシタニー Collège d' Occitanie」が公聴会を組織している。147人もの初等・中等・高等教育に携わる教員らが参加し、そこではオック語の教育方法についての議論が戦わされた。これらの会議の成果は、政府や地域圏の政策決定にも影響を与えている⁸⁶⁾。

どんな授業を展開するか、どんな題材を使うか、などといった具体的な内容については SEO の『オックの土地』や「フェリブリージュ」の「エスコロ」が発行している機関誌が特集を組むなどして紹介している⁸⁷⁾。

こうした動きに対する反対の声も存在する。批判は専ら初等教育へのオック語導入に関してである。授業内容の過重性、オック語の方言の多様性、フランス語習得への障害といった、教育内容に関する批判もさることながら、分離主義につながる危険性が主張された。しかし、中等教育や高等教育では比較的スムーズにオック語の導入はなされた⁸⁸⁾。

オック語教育実施の実態とはどのようなものだったのであろうか。初等教育に関しては、県によって教員がほとんど確保できないところもあった⁸⁹⁾。結局実施に至ったのは、数県の神学校だけであった。言えるのは、上述のように教育カリキュラム（初等教育・中等教育・高等教育）や地域性によって極めて不均等に実現したということである⁹⁰⁾。

中でも、初等・中等・高等レベルの生徒を通信教育で指導する形をとる、トゥールーズの「コレージュ・ドクシタニー」の躍進が目覚ましかった。1927年、「フェリブリージュ」のマジョラルで、聖職者でもあるジョゼフ・サルヴァが、カステルノダリー Castelnaudary に設立した当初は15人だった人数が、1940-41年には400人に増え、1942年には780人にまで増えた。また、トゥールーズ以外の地でも出張講義など行っている。さらに、初等教育修了証書の試験科目としてオック語も認められると、その試験は大学区視学によって「コレージュ・ドクシタニー」に一任されている。1942年6月25日、アヴェイロン県のロデスの30名ほどの小学生が

ヴィシー政権期における「フェリブリージュ」並びに「オクシタン研究協会 (SEO)」の動向に関する一考察 (福留)
フランスで初めてこの試験を受けている⁹¹⁾。

以上、ヴィシー政権期におけるオック語教育の推進のあらましを概観した。マリウス・ジュヴォーのオック語の公教育化の要望からはじまり、授業内容や教材の準備、教員の養成に至るまで、「フェリブリージュ」や SEO が深くかかわり、具体的な準備が進行していることがわかる。

しかしながら、「フェリブリージュ」とヴィシー政権との協力関係は長く続かなかった。その理由は、「フェリブリージュ」の「コンシストワール」がヴィシー政府に対し、積極的な協力を申し出たにも関わらず、それに反応しなかったからである。オック語の公教育化に関して、前述のように政府に対して具体的な協力をしたのに、結果的に 1941 年のカルコピノの前述の回答の内容以上に進展することはなかったからである。地域言語教育の枠組みは、随意科目として、課外授業として、週に 1.5 時間の範囲での認可でしかなかった。1943 年以後は、組織として「フェリブリージュ」がヴィシー政権に対して距離をとろうとする「ためらい」が見られるようになってくる。しかしその「ためらい」も、ヴィシー政権に対する反対活動に転じるような、積極的な動きへと発展することはなかった⁹²⁾。「フェリブリージュ」のヴィシー政権とのかかわり方の特徴をもう少し細かく見てみると、個々の「フェリブリージュ」会員らのそれと、公式の「フェリブリージュ」が組織として見せるの間には違いが存在する。1942 年まではいずれもヴィシー政権への支持を明確に表明しているが、1943 年以後、「マジョラル」クラスの幹部らを中心に、個人としての立場からヴィシー政権を支持し続ける「フェリブル」らは存在していたが、組織としての立場からヴィシー政権へ働きかけることはなくなる。「フェリブリージュ」の公式の活動としては、オック語作家や芸術家の生誕 100 年祭などの記念行事が増えていくのである⁹³⁾。ヴィシー政権の成立とともに、「フェリブリージュ」は、それまで表立った形で追及してこなかった政治的活動と文化的活動の一致を実現させたのであるが、地方制度改革にせよ、オック語の公教育化にせよ、期待にたがう結果に失望し、再び政治的活動を封印し、文化的活動に活動を特化していくのである。

一方、SEO は、個人的にヴィシー政権への支持を表明していた。それがブサックやアリベールのような SEO の幹部メンバーであるだけに、当初は「フェリブリージュ」と同じように見られた。しかし前述のように、SEO はヴィシー政権に対し、あくまでもオック語研究の文化団体として接触している。1940 年から 1942 年の時期は文化的活動と政治的活動を分けて文化的活動を前面に押し出していたが、1943 年にブサックは SEO 代表を解任され、ルネ・ネッリ René Nelli が後継代表となると、ネッリは個人としての立場からレジスタンスに協力する一方、文化的側面からも反ヴィシーの姿勢を示すようになる。

その姿勢は、1943 年に SEO 代表に就任する直前のルネ・ネッリがかかわった文芸雑誌『南方手帳 Le Cahier du Sud』で、「オックの精髓と地中海人」と銘打たれた特別号への、寄稿者の顔ぶれを見るとはっきりする。この号には、ネッリやアリベール、ジョゼフ・ダルボー、マッ

クス・ルーケッタら SEO のメンバーだけでなく、ナチスの支配を逃れてマルセイユに集結した知識人、アンドレ・ジッド、アンドレ・ブルトン、ポール・エリュアール、シモーン・ヴェーユらもかかわっていた。また、同年この雑誌には、サルトルやカミュの文章も発表されている。ネッリの SEO は、このような反ナチス的な知的雰囲気との親和性を持っているのである⁹⁴⁾。1943年以降の SEO は、前述したネッリのように、個人としての立場からレジスタンスに加担するという形の政治的活動と、『南方手帳』を通して、知的な側面での反ヴィシーの姿勢を打ち出すという形で文化的活動を展開し、政治的活動と文化的活動を一致させていったと考えられる。

まとめ

ヴィシー政権が成立すると、「フェリブリージュ」も SEO も、公式、非公式の違いはあれ政権への支持を表明していた。しかし、両者のヴィシー政権への協力の仕方には違いがあった。「フェリブリージュ」は組織としてヴィシー政権に協力し、SEO は個人の立場で協力した。

彼らのヴィシー政権への期待はなんであったのか。それはこれまで考察してきた地方制度改革とオック語の公用語化であった。しかし、ヴィシー政権が実現させていった地方制度改革は、「フェリブリージュ」や SEO の活動の中で培われてきた「フェデラリズム」の理念とは相反するものであった。また、オック語の公用語化も「フェリブリージュ」や SEO が政府に協力して、その実践を促進しようとしたのにもかかわらず、結果として政府の政策は大した進展を見せることはなかった。

1940年のヴィシー政権成立後、「フェリブリージュ」は、地方制度改革とオック語の公教育導入をめぐる、ヴィシー政権と積極的にかかわることにより、政治的活動と文化的活動を同時に推進していった。1943年以後、「フェリブリージュ」は組織としてヴィシー政権を支持することをやめ、個人の立場から支持する形をとった。この時点で「フェリブリージュ」は政治的活動と文化的活動を分離し、文化的活動を前面に押し出していく。レジスタンスに積極的に働きかけることは組織としてはもとより、個人としてもほとんどなかった⁹⁵⁾。

一方、SEO は組織としては1940年当初からヴィシー政権に政治的に働きかけることはしなかった。ただし、個人としては「フェリブリージュ」の会員としてヴィシー支持を表明する形をとっている。この時期の SEO の活動はオック語の復興を大衆レベルよりもむしろ知識人を対象にして展開している点が注目される。政治的活動と文化的活動を分離し、文化的活動を前面に押し出している。そして1943年以降も SEO は、かかるメンバーが個人としての立場からレジスタンスに対して働きかけるという動きは見られるものの、組織としては、ヴィシー政権にもレジスタンスにも政治的にかかわることなく、文化的活動を前面に押し出すというスタン

ヴィシー政権期における「フェリブリージュ」並びに「オクシタン研究協会 (SEO)」の動向に関する一考察 (福留) スを基本に置いていた。ただし、個人としての立場からレジスタンスに働きかけている。

1943年以降の「フェリブリージュ」とSEOは文化的活動に力を入れている点で同様の活動を行っていると見てよいのだろうか。そこには両者の文化的活動に質の相違があるように思われる。

「フェリブリージュ」とSEOの相違点とは何であろうか。「フェリブリージュ」は1943年以後、文化的活動としては、オック語作家の顕彰や記念行事など、「内向き」の活動であるのに対し、SEOは『南方手帳』への参加を通して、反ナチス、反ヴィシーの姿勢を作り上げていくことは前述した。では、その相違は何に起因するものなのであろうか。アブラートの言葉を借りれば、その相違点は、実際の活動よりも、むしろその「イデオロギー的な、知的な」⁹⁶⁾ありように求められる。

「フェリブリージュ」はその設立当初から組織の「非政治性」を打ち出し、政治的主張や活動は分派活動という形態をとってきた。多くの分派活動は短期間で活動を停止してしまっているが、その系譜から1930年にSEOというもう一つの組織が生まれてきた。SEO誕生までは、文化的活動を「フェリブリージュ」が、政治的活動を分派活動が担うという形で活動は進行していったと見ることができる。しかし、SEOが誕生すると、SEO自体がオック語復興にかかわる文化的活動と、時事的な問題に発言し、コミットする政治的活動に分かれていった。前者の活動を支えるのが雑誌『オック(ク)』であり、後者の活動を支えるのが新聞『ウシタニオ』である。

ヴィシー政権が成立すると、これまで非政治性を標榜してきた「フェリブリージュ」は政権の政策にかかわることで政治性を強めていったのに対し、SEOは高度なレベルでのオック語の復興を標榜して文化的活動に力点を置くようになった。ヴィシー政権期においては組織としての性格に逆転が見られるのである。「フェリブリージュ」は文化的活動と政治的活動の一致を果たす一方、SEOは組織としての文化的活動、分派活動としての政治的活動という形の分離が行われている。しかし、1943年になると「フェリブリージュ」は再び従来の文化的活動へと戻り、SEOは文化的活動の中身を、オック語の復興と反ヴィシー、反ナチスの主張に結び付けていったのである。

1944年のフランス解放によりヴィシー政権が崩壊すると、1945年4月28日、レジスタンスに協力したSEOのメンバーらが中心となって、「オクシタン研究所 L' Institut d'Etudes Occitanes IEO」を設立した⁹⁷⁾。このIEOと「フェリブリージュ」が中心となって戦後のオック語復興運動を担っていくことになる。かくて、戦後の新たな展開と本稿で考察した活動や政治理念がどのように関係しているのか、次の研究課題はその解明にある。

注

- 1) Pierre Lavelle, *L'OCCITANIE histoire politique et culturelle*, Institut d'Estudis Occitans, 2004.
- 2) 拙稿「『フェリブリージュ』運動の形成とその理念— 地域言語復興運動に内在する政治理念〈フェデラリズム〉をめぐって—」, (『立命館国際研究』第22巻2号, 2009年, 243-276ページ。)
- 3) 谷川稔/渡辺和行編著, 『近代フランスの歴史』, ミネルヴァ書房, 2006年, 195ページ。
- 4) Pierre Barral, *RAPPORT GENERAL, Régions et régionalisme en France du XV^e à nos jours : actes / publiés par Christian Gras et Georges Livet*, Paris, Presses universitaires de France, 1977, p.423.
- 5) 前掲拙稿, 258ページ。
- 6) 拙稿「戦間期における『フェリブリージュ』再編の試み —「フェデラリズム」の理念の継承と実践—」 (『立命館国際研究』第23巻第2号, 2010年, 229-250ページ。)
- 7) Laurent Abrate, *1900/1968 OCCITANIE des idées et des hommes*, IEO, 2001, p.325.
- 8) 谷川/渡辺, 前掲書, 195ページ。
- 9) Barral, "Idéal et pratique du régionalisme dans le régime de Vichy", *Revue française de science politique*, 24^e année, n° 5, 1974, p.912.
- 10) ロバート・O・パクストン (渡辺和行/剣持久木訳), 『ヴィシー時代のフランス』, 2004年, 柏書房, 196ページ。
- 11) 同上。
- 12) 同上, 197ページ。ただし, バラルは前掲論文において, 州の数を17としている。これはドイツに併合されたアルザスやドイツの軍政下に置かれたフランドル, さらに一つの州として取り扱われるパリなどを除外した数であろう。cf., Barral, "Idéal et pratique du régionalisme dans le régime de Vichy", p.919.
- 13) 1753年頃の“province”の数は58だという。「Agenais, Alsace, Angoumois, Anjou, Artois, Aunis, Auvergne, Bazadois, Béarn, Beaujolais, Berry, Bigorre, Blaisois, Bourbonnais, Bourgogne, Bresse, Bretagne, Brie, Buguey, Cambrésis, Champagne, Condomois, Dauphiné, Flandre, Forez, Franche-Comté, Gascogne, Gâtinais, Gévaudan, Guyenne, Hainaut, Isle-de-France, Landes, Languedoc, Limousin, Lyonnais, Maine, Marche, Navarre, Nivernais, Normandie, Orléanais, Pays Messin, Perche, Périgord, Picardie, Poitou, Provence, Quercy, Rouergue, Roussillon, Saintonge, Saumurois, Toulous, Touraine, Velay, Verdunois, Vivarais」。ここには「Lorraine, Comté de Foix, Comtat Venaissin, Corse, Comté de Savoie, Comté de Nice」などは含まれていない。このように“province”は時代により新たにフランスに併合されたり, 他の“province”と合併したりして一定していない。cf., Roland Mousnier, *Les institutions de la France sous la monarchie absolue: 1598-1789*, Paris, Presses universitaires de France, 1974-1980, p.470-471.
- 14) アンシャン・レジーム期にはカステルノダリー Castelnaudary を中心としてまとまった領域を形成していた。ロラゲについては, 下記のホームページに, 世界遺産の「ミディ運河」並びに12世紀から16世紀にかけて青の染料パステルブルーの生産で経済的に繁栄し, 取引に従事した商人や貴族らが建てた城館など, 歴史的観光地としてアピールされている。
<http://fr.wikipedia.org/wiki/Lauragais>
なお, 現在のロラゲは, 1995年の通称「パスクワ法」および1999年の「ヴォワネ法」で定められた「郷土圏 le pays」と認められて, 2004年に“Le Pays Lauragais”として復活している。「郷土圏 le pays」は行政区画や地方自治体ではない。現代の「郷土圏 le pays」はアンシャン・レジーム期の「くに le

ヴィシー政権期における「フェリブリージュ」並びに「オクシタン研究協会 (SEO)」の動向に関する一考察 (福留)

pays」と名称は同一でも、全く違うものである。アンシャン・レジーム期の「くに le pays」は、地理的条件や歴史的条件によって長い間に「自然と」形成された領域のことである。現代の「郷土圏 le pays」は、経済活性化のため、県や地域圏の垣根を越えて結びついた一種の計画領域である。ロラゲも三つの県に分断された「くに」の領域を復活することで、県の垣根を越えた観光経済の振興を図ろうとする一種の計画領域とみてよい。しかしロラゲの場合、結果的にアンシャンレジーム期の「くに le pays」の復活となっている。[http://fr.wikipedia.org/wiki/Pays_\(am%C3%A9nagement_du_territoire\)](http://fr.wikipedia.org/wiki/Pays_(am%C3%A9nagement_du_territoire))

http://fr.wikipedia.org/wiki/R%C3%A9gion_naturelle_de_France

- 15) Barral, "Idéal et pratique du régionalisme dans le régime de Vichy", p.922.
- 16) *ibid.*
- 17) アンシャン・レジーム期の「総督 gouverneur de province」の「管轄区 gouvernement」と「州 province」は完全に同一ではなく、複数の「州」にまたがっている場合もあった。入江和夫氏は "gouverneur de province" を「州総督」ではなく、「地方総督」と訳している。cf, 入江和夫, 「フランス・アンシャン・レジームの地方総督 (Gouverneurs de province) 制」(一) — 国王官僚機構に関する一詩論 —, 『法政論集』94巻, 名古屋大学法学部, 1984年, 15-17ページ。
- 18) 柴田三千雄 / 樺山紘一 / 福井憲彦, 『世界歴史体系 フランス史 I』, 山川出版社, 1995年, 25ページ。
- 19) アンシャンレジーム期の官僚は、官職の世襲が認められる「保有官僚 officier」と、国王により自由に任免される「委任官 commissaire」に大別される。「地方総督」の起源は、百年戦争のころの混乱の收拾のために、国王親族や大貴族が、国王の「委任 commission」を受けて派遣された「国王総代理官 lieutenant-général du roi」であり、常時罷免が可能であったが、16世紀後半には世襲化し、保有官僚のような様相を呈していたという。cf, 入江, 前掲論文, 4-7ページ。
- 20) Christian Faure, *Le projet culturel de Vichy : folklore et révolution nationale, 1940-1944*, Paris, Editions du CNRS, 1989, p.94.
- 21) バクストン, 前掲書, 197ページ。
- 22) 同上。バクストンは二つの目的について、「秩序維持の問題は… (中略) …1791年の県の枠を越えた広域での情報交換や高速移動憲兵隊の行動が求められる… (中略) …食糧供給を円滑に機能させるためにも、県ごとの縄張り意識を解消し、物資が各県に死蔵されるのを防ぎ、より広い地域規模での食糧分配を計画することが必要となった」と説明している。
- 23) Jacques Isorni (éd.), *Quatre années au pouvoir / Philippe Pétain*. Paris, couronne littéraire, 1949, p.105.
- 24) Faure, *op.cit.*, p.93.
- 25) バクストン, 前掲書, 197ページ。
- 26) 拙稿「戦間期における『フェリブリージュ』再編の試み —「フェデラリズム」の理念の継承と実践—」, 230ページ。
- 27) この新聞は1939年に、雑誌『オックの土地 Terra d'Oc』に引き継がれる形で終刊している。cf, Abrate, *op.cit.*, p.613.
- 28) Simon Calamel/Dominique Javel, *La langue d'oc pour étandard — Les FÉLIBRES (1854-2002)*, p.192.
- 29) *Ibid.*, p.193.
- 30) 「花の競詩アカデミー」と「フェリブリージュ」の関係については、前掲拙稿「戦間期における『フェリブリージュ』再編の試み —「フェデラリズム」の理念の継承と実践—」, 236ページを参照。

- 31) Faure, *op.cit.*, p.94.
- 32) 「フェリーブル félibre」とは、一般にオック語で創作活動を行う人のことをさす。意気投合したフェリーブルが集う組織が「フェリブリージュ」である。したがって「フェリブリージュ」の会員ではないフェリーブルも当然存在する。
- 33) Jean-Marie Guillon, “L’affirmation régionale en Pays d’oc des années quarante”, *Ethnologie française*, Vol.,33-3, 2003, P.U.F, p.427.
- 34) 「フェリブリージュ」の代表を「カプリエ capoulier」とよぶ。
- 35) 「フェリブリージュ」の創設者の甥。創設者と同名のため、「甥（ヌヴー）」を付けて区別する。
- 36) アムレットィとモーラスは、1892年パリで第三代カプリエに就任したばかりのフェリックス・グラの祝賀会の席上、「州 province」と地方三部会の復活をふくむ主張を「フェデラリズム」と称して演説した。パリ・フェリーブル協会は、この行為を「フェリブリージュ」の活動に政治を持ち込まないという活動方針への違背であるとしてアムレットィ、モーラスに賛同する人々を除名した。
以上の詳細については、拙稿『「フェリブリージュ」運動の形成とその理念— 地域言語復興運動に内在する政治理念<フェデラリズム>をめぐって—』, 第3章, 257-262ページを参照。
- 37) 「フェリブリージュ」は一種のアカデミー機関として、「コンシストワール」を持ち、その会員を「マジョラル majoral」という。人数は「カプリエ」を含めて50人である。フェリーブルの中の有力会員とも言うべき存在である。cf., Abrate, *op.cit.*, p.326, p.329.
- 38) André Armengaud/ Robert Lafont (sous la direction de), *Histoire d’Occitanie*, Paris, IEO, Hachette, 1979, pp.861-862.
- 39) Jean Pierre Azéma, *De Munich à la libération, 1938-1944*, (Nouvelle histoire de la France contemporaine ; 14), (Points ; Histoire ; H114), Paris, Seuil, 1979, p.89. note 3.
- 40) Abrate, *op.cit.*, p.327.
- 41) A-J. Boussac, “Le Maréchal Pétain et la langue d’Oc”, *Terra d’Oc*, Supplément au N° de février 1941.
- 42) 「フェリブリージュ」には設立当初は4つの支部会（マントゥナンス Maintenance）が置かれたが、1921年には7つの支部会となっていた。「フェリブリージュ」の組織については、拙稿『「フェリブリージュ」運動の形成とその理念— 地域言語復興運動に内在する政治理念<フェデラリズム>をめぐって—』, 245ページを参照。
- 43) 地区会は「エスコロ escolo（フランス語のエコール école）」と呼ばれ、「フェリブリージュ」の末端組織である。
- 44) Michel BARIS, *Langue d’oïl contre langue d’oc : De la prise de Montségur (1244) à la loi Dexonne (1951) : Evolution historique du contre-enseignement de l’occitan, oïls de son enseignement*, Lyon, Fédérop, 1978, pp.92-94.
- 45) *Ibid.*, p.95.
- 46) Lavelle, *op.cit.*, p.458.
- 47) Abrate, *op.cit.*, p.328.
- 48) *Ibid.*, p.335, p.342.
- 49) Faure, *op.cit.*, p.71.
- 50) Mireille Meyer, “À propos de Jean Charles-Brun et du régionalisme”, in *Le Régionalisme* par Jean Charles-Brun édité et présenté par Mireille Meyer, Paris, Editions du C.T.H.S, 2004, pp.7-44.

ヴィシー政権期における「フェリブリージュ」並びに「オクシタン研究協会 (SEO)」の動向に関する一考察 (福留)

- 51) *Ibid.*, p.7
- 52) ドゥ・リカールについては、前掲拙稿, 「『フェリブリージュ』運動の形成とその理念— 地域言語復興運動に内在する政治理念〈フェデラリスム〉をめぐって—」, 第2章の251-257 ページ参照。
- 53) Meyer, *op.cit.*, p.16.
- 54) *Ibid.*, pp.17-18.
- 55) *Ibid.*, pp.20-21.
- 56) *Ibid.*, p.22.
- 57) *Ibid.*, pp.24-25.
- 58) *Ibid.*
- 59) *Ibid.*, p.19.
- 60) 前掲拙稿, 「『フェリブリージュ』運動の形成とその理念— 地域言語復興運動に内在する政治理念〈フェデラリスム〉をめぐって—」, 269 ページ。
- 61) Meyer, *op.cit.*, pp.26-27.
- 62) Jean Charles-Brun, *Le Régionalisme* par édité et présenté par Mireille Meyer, Paris, Editions du C.T.H.S, 2004, p.124 (p.184 édité).
- 63) Meyer, *op.cit.*, p.29.
- 64) *Ibid.*, pp.29-30.
- 65) *Ibid.*, pp.31-32.
- 66) *Ibid.*, p.33.
- 67) *Ibid.*, p.34.
- 68) *Ibid.*, p.35.
- 69) *Ibid.*, p.36.
- 70) *Ibid.*
- 71) 前掲拙稿, 「戦間期における『フェリブリージュ』再編の試み — 「フェデラリスム」の理念の継承と実践 —」 参照。
- 72) Meyer, *op.cit.*, pp.37-38.
- 73) クリスチャン・フォールはこの点を明らかにした。cf., Faure, *op.cit.*
- 74) Meyer, *op.cit.*, p.39.
- 75) Henri du Moulin de Labarthète, *Le temps des illusions*, Genève, Les Editions du Cheval Ailé, 1946, p.284. 具体的な氏名は以下のとおり。氏名の後ろの () は旧州名である。シャルル・ブラン Charles Brun (プロヴァンス), フランソワ・ボンセ François Poncet (ドーフィネ), ゲブリヤン Guébriant (ブルターニュ), バルドゥー Bardoux (オーヴェルニュ), レオン・ノエル Léon Noël (フランシュ・コンテ), カズィオ Caziot (ペリー), フェルネ提督 l'amiral Fernet (イル・ド・フランス), ピエール・モーリアック Pierre Mauriac (ギユイエンス), スウルロー Surleau (リムーザン), テラシェ Terracher (アルザス), マニユエル・フルカドゥ Manuel Fourcade (ガスコーニュ), ミストゥレル Mistler (ラングドック), ボワヴァン・シャンポー Boivin Champeaux (ノルマンディ)。
国民評議会案の州名と、上記のバタン個人の覚書の州名に異同が見られる。ここでは州の合併は考慮されていない。
- 76) Barral, "Idéal et pratique du régionalisme dans le régime de Vichy", p.923.
- 77) Meyer, *op.cit.*, p.39.

- 78) Faure, *op.cit.*
- 79) Calamel/Javel, *op.cit.*, p.195. なお、ヴィシー政権の正式の発足は、ヴィシーで開催された国民議会における、第三共和憲法の廃止および新憲法制定のペタンへの一任、およびペタンの国家主席就任が認められた7月10日ではあるが、ペタンは7月1日に第三共和政最後の首相としてボルドーからヴィシーに政府を移している。この時点ではヴィシー政権はまだ発足しているとは言えないが、実質的には既にペタン政権であったと考えてよい。
- 80) Abrate, *op.cit.*, p.330.
- 81) Faure, *op.cit.*, p.201.
- 82) Abrate, *op.cit.*, p.336.
- 83) *Ibid.*, pp.342-343. in *Lou felibrige*, N° 97, février-mai 1942.
- 84) カンプルーは自らの「フェデラリズム」思想について、1935年に著書『オクシタン陣営のために *Per lo camp Occitan*』を発表している。拙稿、「戦間期における『フェリブリージュ』再編の試み — 「フェデラリズム」の理念の継承と実践 —」, 第3章第2節, 244-246 ページ参照。
- 85) Faure, *op.cit.*, p.201.
- 86) *Ibid.*, pp.202-203.
- 87) *Ibid.*, p.204.
- 88) *Ibid.*, p.206.
- 89) *Ibid.*, pp.205-206.
- 90) *Ibid.*, p.207.
- 91) *Ibid.*, pp.209-210.
- 92) Abrate, *op.cit.*, pp.346-347.
- 93) Calamel/Javel, *op.cit.*, p.196.
- 94) Lavelle, *op.cit.*, pp.468-469.
- 95) ビエール・ラヴェルは、ジョゼフ・サルヴァが1944年6月にドイツによってレジスタンスへの加担を疑われて収容所送りになった事例を報告している。これはユダヤ人迫害に反対してドイツに抗議する聖職者の存在に過敏になったドイツ側の勘違いによるものだという。cf., Lavelle, *op.cit.*, p.458.
- 96) Abrate, *op.cit.*, p.353.
- 97) Lavelle, *op.cit.*, pp.474-475. 設立メンバーは、イスマエル・ジラルール Ismaël Girard, カミーユ・スーラ Camille Soulat, シャルル・カンプロー Charles Camproux, ルネ・ネッリ René Nelli, マックス・ルーケット Max Rouquette, フェリックス・カスタン Félix Castan, ロベール・ラフォン Robert Lafont らである。また、本来はオック語とは関係ないが、南仏に亡命してレジスタンスに参加していた人物も設立に参加している。IEO 初代代表のジャン・カソー Jean Cassou やダダイズム、シュールレアリスムの詩人トリスタン・ツァラ Tristan Tzara らである。

(福留 邦浩, 立命館大学大学院国際関係研究科研究生)

Considerations concerning the trend of the “Félibrige” and the “Société d’Études Occitan”(SEO) in the Vichy France regime — Local system reform and public education about the langue d’oc —

This paper’s objective is to consider how the “Félibrige” and the “Société d’Études Occitan” (SEO) became involved with the Vichy France regime. Since the “Félibrige” was founded, it gave rise to many factions that made political demands though it publicly affirmed an apolitical standpoint. Most of those factions’ activities were short-lived, but among them, one lasting group emerged, SEO.

These organizations aimed at the revival of langue d’oc, one of France’s regional languages, and brought up “federalism” as a political belief to revive autonomy in the region.

The Vichy regime faced their demands publicly and positively for the first time in French history, however, the reforms lasted at most only four years because of the regime’s collapse. But the cause of the reforms failure existed within the considerable difference between the government’s actions and their original demands.

When a nationalist movement is considered for the long term, cultural activities and political activities appear alternately or complementary. Before the Vichy regime, the “Félibrige” was apolitical and the factions were political, but in the period of Vichy, the former was political and the latter, SEO, shifted to cultural activities.

(FUKUDOME, Kunihiro, Doctoral Research Student, Graduate School of International Relations,
Ritsumeikan University)

